

# 中国人日本語学習者を対象とした異文化間 コミュニケーション能力の養成について

Development of the intercultural communication competence

for the Chinese learner of Japanese

李 韡

Wei Li

国語教育講座客員研究員・  
遼寧師範大学外国語学院

杉 村 孝 夫

Takao SUGIMURA

国語教育講座

(平成15年9月10日受理)

## 一 中国における日本語教育の現状

近年来政治・経済・文化・体育など幅広い面において、国際化が進むにつれて、世界は国境のない社会になろうとしている。地球村という言葉があるように、これからの世界は肌の色・言語・文化背景の違う人々が朝夕を共にしながら暮らす異文化間コミュニケーションの社会になると思われる。したがって、異文化間コミュニケーションの機会がますます増え、同時に誤解と摩擦の機会も増えている。現在、地域的な紛争、民族同士の衝突が後を絶たないが、その原因は政治・経済的要素の外に文化交流の不足にもあるのではないかと思う。これから世界の平和を守るためには異文化間コミュニケーションを円滑に行うことがますます重要になってくる。

これまでの中国の日本語教育を振り返ってみよう。筆者(李)が20年間、中国の中学校、大学で日本語教育に携わった経験からすると、たいていは社会のニーズに応じた、すなわち経済・技術のための教育で、『聴く・話す・読む・書く・訳す』といった実技重視の教育だった。また、日本語学習者は言語とは文法規則の体系だという認識から抜け出すことがなかなか出来なかった。そして、文法規則の体系の知識はいうまでもなく、コミュニケーションにおいて、重要な要素である。だからといって文法規則の体系イコールコミュニケーション能力とは言えない。

2001年中国の《全国高等学校日語専業教学大綱》(指導要領)では、はっきりと日本語教育の目的はコミュニケーション能力の養成だと示した。中国の日本語教育分野においても、これからは異文化間コミュニケーション能力養成の重要性が認められるようになろう。これから日本語教育をどのようにして、実技教育から文化教育へ、受信型から発信できる能力の養成へと変化させるのが課題である。本論文では中日両国の文化の異同点を比較しながら、中日異文化間コミュニケーションにおいて起きやすい障害、その原因、そしてその指導方法を検討する。

## 二 異文化間コミュニケーションについて

### 1 文化とは

最近、文化という言葉は氾濫するほどよく使われている。食事については食文化、服飾については服飾文化、教室に入ると「課卓文化」(机の上に落書きしたもの)など、何もかにも文化という言葉をつけるきらいがある。一体文化とはなんであろう。文化についての概念も研究分野によって、それぞれ違うが、大別すると二つに分けられる。一つは文明化の歴史としての文化で、科学・芸術・歴史を指している。もう一つは人類学的、社会学的に見た文化で、年中行事・結婚・社会的習慣・衣・食・住など生活様式を指す。いわゆる生活文化である(佐野正之ほか 1995)。

これから取り上げる文化は後者の生活文化を指す。

### 2 異文化間コミュニケーション能力とは

西田ひろ子(2000)によると、異文化間コミュニケーション能力とは、「文化背景の異なる者との間で適切な相互作用を行うために、状況に応じて適切な言語及びコミュニケーション行動をとることの出来る能力である」。この異文化間コミュニケーションについても、さまざまな研究報告が出されている。例えば、ワイマン(Wiemann, 1977)はコミュニケーション能力についての研究を重ね、「コミュニケーション能力のある者」は以下のような能力を身に付けている者だと報告している。(a) 協調性—相手が話しているときは相手の目を見る。相手の話の内容に応じてうなずき、話の内容を理解していることを示す。自分だけが話しつつ相手だけに話をさせることはせず、話し手と聞き手の役割を交替する。親しみやすい顔の表情をする。(b) 相手に不安感を抱かせないこと—手足や身体をむやみに動かしたり、相手のほうに身体を乗り出したりしない。早口で話さない。話の途中でつまったり、黙ったりしない。(c) 相手の立場に立って物事をとらえること—相手が話しているとき、うなずいたり返答したりして、相手の話を理解していることを示す。「あなたがどのように感じているかわかります」といったような相手の立場を理解していることを示す返答をする。(d) 行動様式の柔軟性—それぞれの状況で適切な言語表現をする。目上の人には敬語を使うといったように、相手と自分の関係を明確に表す言語表現を用いる。(e) コミュニケーションの流れをスムーズに保つこと—相手が話しているときに話し始めない。話し手と聞き手の役割を互いに交替する。急に黙り込んだり、いつまでも黙っていない

また、ルーベン(Ruben)はこのコミュニケーション能力を具体的に次の七つの能力に分けている。

- (1) 敬意伝達能力—相手の話に関心を示したり、相手に敬意を表しながら対応することのできる能力
- (2) 価値判断抑制能力—相手の話にすぐ良し悪しの判断をせず、十分な情報を得てから、また相手の感情を考慮しながら返答することができる能力
- (3) 「異文化間コミュニケーションについての」知識運用能力—ものの見方、知識・感情の表現の仕方は文化によって異なることを理解できる能力
- (4) 感情移入能力—相手の立場に立って考えることのできる能力
- (5) 役割行動能力—この能力は三つの側面から構成されている。
  - a 業務遂行能力—アイデアを出したり、情報を集めたり、問題点を明確にしたりすることが出来る能力、

- b 対人関係調整能力—グループメンバー間のトラブルを和らげたり、メンバー全員にグループ活動の成果が行き渡るように配慮することができる能力、
  - c 自己中心的行動—この側面は他の二側面とは逆に作用するもので、他の者の意見に極端に反対したり、すでに検討された問題を蒸し返したりする行動を指す。
- (6) 相互交流管理能力—話をする際、話し手と聞き手の役割をうまく交替したり、適切な時に話を始めたり終わらせたりすることができる能力
- (7) 状況即応能力—未知の状況に神経質になったり、不安を抱いたりせずに素早く適応できる能力

以下はこの分類を参照しながら異文化コミュニケーション能力の養成について考察する。

### 3 中日両国間コミュニケーションにおける障害

異文化間コミュニケーションといっても文化と文化との間の直接の交流ではなく、文化的障害を乗り越えた人と人との交流である。たとえば中国文化を持つ中国人Aと日本文化を持つ日本人Bとの交流である。このような観点から見た場合、現在中日両国間のコミュニケーションはどうだろう、知見によればまだまだ不十分である。

今のところ中日交流といっても政府間、団体間の経済的交流が主であった。ここ十年間日本はずっと中国の最大の貿易対象国であり、日本にとって、中国は第二の貿易対象国となっている、(王毅『和平合作、共創未来』)。しかし、民間における個人的、文化的交流はまだまだ少ない。また戦争時代に残された潜在の影響もあって、日本人に対する誤解や偏見が大いに存在している。

### 4 中国人の対日観、対日意識問題

ここではまず中国人、日本人が相互にどれだけ親しみを感じているかを見てみよう。以下は2002年、国際交流研究所(日本)が中国日本語教学研究会の協力を得て、日本への親しみの度合いについて行ったアンケートの結果である。

中国の日本語学習者全体(12,967人)では、日本に「親しみを感じる」と「どちらかと言えば親しみを感じる」が56.7%を占め、反対に、「親しみを感じない」と「どちらかと言えば親しみを感じない」が29.4%だった。

男女別では「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感じる」の割合は、女性(8,298人)が58.6%で、男性(4,669人)の53.6%を5ポイント上回り、逆に、「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感じない」の割合は、男性が32.4%で、女性の27.7%より4.7ポイント高かった。男性より女性のほうが、日本により親しみを感じている、という結果だった。

属性からみた内訳により、「中国の大学生、院生」(9,183人)、「日本語教師」(467人)、「留学生、就学生」(3,317人)別に見ると、それぞれに違いがある。

「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感じる」の割合は、アンケート回答数の7割以上を占める「中国の大学生、院生」が53.7%で、一番低かった。最も高かったのは、「日本語教師」(78.6%)で、「中国の大学生、院生」を24.9ポイントも上回った。「留学生、就学生」(61.9%)は「中国の大学生、院生」より8.2ポイント高かった。

なお、国際交流研究所が1999年に、中国の大学生、院生(日本語学習者)のみを対象に「対日観」をテーマに行ったアンケート調査(回答者7,634人)では、「親しみを感じる」と「どちらかと言えば親しみを感じる」の合計は60.0%だった。今回の調査では、(親しみ)の度合いが6.3ポイント低くなった。

一方、「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感じない」の割合は、「中国の大学生、

院生」(32.9%)、「留学生、就学生」(21.8%)、「日本語教師」(15.2%)の順だった。

「中国の大学生、院生」の男女別では、①「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感ずる」割合は、大学生、院生の約7割を占める女性(6,354人)が56.1%だったのに対し、男性(2,829人)は半分以下の48.5%だった。男子学生より女子学生のほうが、日本に対して、「親しみを感ずっている度合いが7.6ポイント高い。②「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感ずらない」の割合は、男性(38.7%)が女性(30.3%)を8.4ポイント上回った。

「留学生、就学生」の男性(1,662人)と女性(1,655人)を比べると、「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感ずる」割合は、女性(64.3%)が男性(59.7%)を上回った。これに対し、「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感ずらない」は、男性(23.2%)が女性(12.5%)より高かった。

内訳を全体的に見ると日本人との交流が多いほど、また、男性より女性の方が親しみを感ずる割合が高いことが分かる。

「どちらかと言えば、」を含めた「親しみを感ずる」の割合が、56.7%というのは、低くはない。しかし、ここで注意すべきことはインフォーマントはすべて日本語を教えているか、習っている人達であること、そしてこのインフォーマントは中国の人口においてはごくわずかな割合に過ぎないことである。もし、このような日本語関係者にかぎらず、一般の中国人を対象にアンケートを取れば、結果はそれほど楽観的ではないと思う。

最近、中国で京滬線(北京—上海)の特急列車の建設にあたり、どこの国と技術的に合作するか検討中であるが、日本との合作を反対する声もある。

日本においても中国への親しみの度合いについてアンケートをとっている。内閣府の《外交に関する世論調査》(平成14年)での中国に対して、「親しみを感ずる」割合は次のようである。1980年に親しみを感ずる割合は78.6%にも達している。しかし、1989年には51.6%、2002年には45.6%に落ちている。逆に親しみを感ずらない割合は1980年には14.7%、1989年には43.1%、2002年には49.1%にあがっている。

以上の数字を見ると近年来中日両国間には相互に不信感が存在しており、コミュニケーションは、まだまだ足りないと言える。中日間コミュニケーションにおいて、このことがまず第一の障害となっている。

### 三 中日両国間異文化交流において障害がおきる原因

#### 1 敬語意識による障害

障害というとき、相手の言っていることの意味が分からなかったり、あるいは誤解したり、誤解されたりして、意思疎通が出来ない場合と、意思疎通が出来ても、相手に不愉快な感ずれを与えることがある。

前述のように、西田ひろ子(2000)はルーベンの説を引用して、コミュニケーション能力の一要素として、まず敬意伝達能力をあげたが、中国人学習者にとって、これは確かに難しいことで、常に問題点になることである。国際交流研究所(2002)のアンケートによると「中国の大学生、院生」が日本語を勉強するうえで「日本語」そのものに関して、「困る」と答えたのは、「敬語の使い方」が1,242人で最も多く、記述のあった回答(8,051人)の15.4%を占めている。

日本社会では不可欠な「敬語」だが、中国人の学習者にとっては[紛らわしい]、[使い方

が面倒]で、[敬語を使うと頭が痛い]ということになる。丁寧語、尊敬語、謙譲語と三種類もある複雑な日本語の「敬語」は、「相手の身分によって使う言葉も違わなければならない」ので、中国の日本語学者が使いこなすのはかなり難しいようだ。

「困ること」で次に多いのが「外来語」の458人で、全体の5.7%を占める。「外来語の勉強は、もう一つの外国語を勉強するようです」、「外来語が英語の発音と違います。困ります」など。「外来語禁止。敬語自由」という「切実な訴え」もあった。

5人に1人が「敬語」か「外来語」で困っていることになる（「敬語」と「外来語」の両方を記述した回答は59人。先に記述してある方で分類）。

このほか、「教科書の内容が古い」「資料が少ない」「日本の雑誌、新聞が読みたい」など、日本の情報不足を訴える回答も多かった。「曖昧な言葉が多い」「助詞の使い方が難しい」「アクセントが困る」「擬態語と擬声語が多すぎる」「片仮名が不便」などもあった。簡体字を使っている中国の学生には、「漢字の書き方や、読み方が難しい」という声もあった。さらに、「日本人や日本人学生と話す機会が少ない」という不満から、日本語学習のために、「日本へ留学したい」を含めて「日本人との交流」を希望する学生も多い。

以上の結果から分かるように様々な困難点が上げられている中で、中国人学習者にとって敬語が最も難しいことである。

それでは、どうして中国人の学習者にとって敬語の使い方は難しいのだろうか、以下の理由が考えられる。

日本社会に比べると中国社会は全般的にまず敬語意識が薄いということである。歴史から見れば中国には二千年に渡る長い儒教社会があった。儒教の根本的な思想は三従、四徳・三綱、五常<sup>(注1)</sup>であるが、これは身分社会、上下関係を守る思想であると言えるだろう。とすれば、中国の社会にも強い敬語意識があったはずである。現代日本語に豊かな敬語表現があるが、中国の文言文(古代漢語)には、それに当たる敬語表現が多く存在していた。例えば、駕臨(いらっしゃる)、用膳(召し上がる)、賜(くださる)、拝見(拝見する)、拝読(拝読する)などいろいろある。しかし、近代に入って、このような敬語表現は殆ど姿を消してしまった。原因としては、中国がアヘン戦争、日清戦争で散々負けたとき、当時のインテリたちは、その原因は中国人を支配している儒教思想にあると思った。そして、全国にわたり、反儒教運動を行った。つまり、新文化運動<sup>(注2)</sup>である。また、新中国が成立してからも、ずっと儒教を批判してきたし、プロ文革時代には「批林批孔」(林彪と孔子を批判する)を行い、徹底的に儒教を追放した。その結果、現代漢語では、敬語というと「请」(どうぞ、～てください)とか「您」(目上の相手に言及する)くらいしか残っていない。そして、文法的な敬語体系はもともと存在しない。現代漢語に「拝見、拝読、拝望、令尊、令郎、令愛、愚兄、小生、犬子」など、敬語がないわけではないが、あくまでも手紙文とか、特別な場合にだけごく稀に使い、普通の会話では殆ど使われていない。だから、会話の場合、上下関係などを考えながら言葉を選ぶ習慣や敬語意識があまりない。

日本語でよく使われている「先輩、後輩」という言葉も現代漢語にはない。最近大学内では日本語の「先輩」が中国語で「学长、学兄、学姊」と、そして、「後輩」が「学妹、学弟」などと訳されているが、役所とか、企業の場合はまだ日本語の「先輩、後輩」にあたる訳語は用いられていない。以上のように、中国人学習者には、上下関係、即ち敬語意識が薄く、日本人とコミュニケーションをするとき敬語を使うのを忘れてしまったり、間違えたりして、障害をもたらすのである。

## 2 生活習慣による障害

中国が市場経済政策を実施して以来、最も大きな変化は多分買い物の習慣ではないかと思う。かつては値段の交渉などは一切なかったが、今はたいていの場合は値段の交渉してから、買い物をするのが普通である。売り手も初め、まず実際売りたい値段よりずっと高い値段を言い出し、買い手のほうもまず安い値段を言って、両方が交渉する。両方とも納得のいく値段まで行くと売買は成り立つのである。日本では買い物の時、値段の交渉は殆どないようである。

次の例をみよう。

中国人留学生のAさんがアパートを借りるために、ある不動産屋へ行き、アパートを紹介してもらおうが、Aさんがあちこち細かく「難癖をつけ」、家賃を値切ろうとして、断られてしまった。中国の習慣では「難癖をつけ」て、値切る行為が納得の行かないことでもない。値段交渉の手段として、いろいろあるが、上の方法もよく使われる手段の一つである。しかし、日本の習慣ではなかなか受け入れにくい。日本の習慣では、値段の交渉をするとしても、まず、「難癖をつける」ことはないようである。日本の場合は直接「難癖をつける」ことは避けて、まず相手の長所を誉める言葉を言うだろう、それから、それとなく自分の主張をするのがルールに合うようである。結局、断られた中国人のAは日本人が中国人を差別すると誤解したし、日本の不動産屋のほうも中国人のAのことを礼儀知らずとか、と思って互いに不愉快なことになってしまったのである。

### 3 言語による障害

#### a 言語習慣による障害

言語による障害は言語能力—不適切な語彙の選択や語順の誤りなどで意思の疎通が出来ない場合と言語運用の背景にある前提の不理解によるディスコミュニケーションの場合とが考えられる。

中日両国の言語の異同点についての研究は多くの学者により、盛んに行われている。陳岩『日译汉教程』北京大学出版社、王少鋒『日韓中比較文化論』名石書店など。ここでは詳しくは触れないことにする。

コミュニケーションのうえで言語の機能から中日両国語を比べてみよう。

言語の機能について、ビューラー(仏 *langage*)の表現・喚起及び叙述三機能説がある。ヤコブソン(R. Jakobson)はこのビューラーの説に基づいて言語活動を次の6つに仕立て上げた。ビューラーの何を述べるかをいう叙述機能を関説的(referential)、或いは告示的(denotative)、または認知的(cognitive)とよび、伝達の主要任務としている。そしてビューラーの表現機能を情動的(emotive)または表現的(expressive)と称し、ビューラーの喚起機能を動能的(conative)としている。ヤコブソンは3つの基本的機能に加えて、話し手と聞き手を結びつける交話的(phatic)機能を取り上げている。これはマリノフスキー(B. Malinowski)のphatic communion(挨拶)を採用したもので、これによって話し手と聞き手の間に言語的場が設定される。さらに、ヤコブソンはコードとしての言語形式が同じものであるかどうかを確かめるメタ言語的(metalingual)機能という新しい要因を唱えるが、これは話し手と聞き手の間で同じコードを使用しないと伝達がちんぷんかんぷんになり、その調節が必要になるというのである。最後にヤコブソンが重視する詩的(poetic)機能で、これは上述の叙述機能の技巧に関するものである。(R. Jakobson, *Essais de linguistique generale*, Paris, 1963; 川本茂雄監修『一般言語学』みすず書房, 1973)

日本語では、この話し手と聞き手を結びつける交話的機能が特に発達していて、挨拶語など、交話的言葉が非常に豊かである。そして、多くの日本人には、交話的言葉を上手に

使えることが、その人の教養や成熟度、質の良さの証と考えられているようである。これに対して、中国語には交話的言葉が割と少ない。次の例を見よう。

「はじめまして、どうぞ、よろしく」

「こちらこそ、どうぞ、よろしく」

「おや、お出かけですか、どちらへ」

「ちょっとそこまで」

「ああ、そうですか、行ってらっしゃい」

「今日は本当に暑いですね」

「ええ、本当に暑いです」

「こんにちは」

「こんにちは」

以上は日本人の日常生活の中で常に使う言葉である。これらを情報の交換から見ると、意味のない問答が行われているといえよう。これらは何が言われているかより、何か言われていることに意味があるのである。即ち、上の会話は主に交話的機能を果たしているのである。これに対して中国語は交話的機能が非常に弱い。上の会話を中国語に訳そうとすると、かなり難しい。

「初次见面，请多关照」

「初次见面，请多关照」

「您上哪儿去？」

「到那边一趟」

「是吗，请您走好」

「今天真热啊」

「是的，真热」

「午安」

「午安」

とか、現在訳語は出ているものの、実際には殆ど使われていない。日本語を全然知らない中国人に初めて会ったとき、「初次见面，请多关照」とかいったら、たぶんみんな可笑しく感じるだろう。むしろ、全部「你好」、「你好」と訳したほうが自然な中国語になると思う。逆に中国人学習者が日本人と日本語でコミュニケーションをするときには常に問題点になるのである。「今日は本当に暑いですね」と言われて、「いいえ、昨日はもっと暑かったです」と答えて、相手に不愉快な感じを与えてしまうことがある。

また、次の例をみよう。

日本人は日常生活のなかで

(子供に会い) かわいいですね。

(新しい服装を着た人に) よく似合いますね。

(ご馳走してもらい) うまい、美味しい。

などと殆ど無意識的に使う。それでコミュニケーションが円滑に行われるのである。しかも、日本人同士なら、なんとなく本音が、たてまえかが分かる。しかし、中国人学習者から見れば子供があまり可愛くもないし、服装もあまり似合わない場合、日本人は嘘つきで、虚偽的だと誤解してしまうことがある。

中日両国の言語習慣で、大きく違うことにお礼の言い方がある。日本人が生活のなかで、一番多く口にし、耳にする言葉という、たぶん「ありがとう」であろう。日本人は見知らぬ人に対しても、親しい人に対してもよく「ありがとう」と言う。しかも繰り返して言う。なにか恩恵を受けた場合、その場で何回も何回も「ありがとう」と言う。そして、何日か経って出会うとまた「この前はありがとうございました。」と言う。これで終わりかというとその次に会うとまた「この間はありがとうございました。」である。しかし、中国人の習慣では「ありがとう」を繰り返して言うことはない。特に親しい間だと殆どお礼を言わないで済む。親しい間で「ありがとう」と言うと他人扱いすることになってしまい、却って角が立ってしまう。中国人の習慣では受けた恩を何も言わずに胸中に刻み込み、将来返すことによって感謝の気持ちを表すのである。だから、中国人学習者は日本人に繰り返して感謝の言葉を言われると「自分はやっぱり他人で、親しい友人じゃないんだな」と思い、不愉快を感じることもある。逆に中国人が中国の習慣で、日本人に繰り返して「ありがとう」と言わないと、日本人のほうでは、中国人は礼儀知らずと思ってしまうことがある。結局はコミュニケーションがうまく行かないことになってしまう。

#### b 相槌の言葉による障害

日本語の会話の特徴として、相槌言葉があげられる。日本人は会話をするとき、相手が無反応のままだと、話し手は不安を感じたり、話しづらくなることがある。聞き手としてはうなずきや相槌など、反応を示しながら聞くことで、話を聞こうとする自分の熱意を伝える。このようにして、コミュニケーションが深まっていくのである。日本語の会話では相槌は一つの礼儀であり、ルールでもあるとも言えよう。だから、日本語には相槌の言葉も豊富である。「はい」、「うん」、「そうですか」、「そうですね」、「なるほど」、「へー」、「～のですね」など実に多い。これらをうまく使えば、コミュニケーションはスムーズに行くのである。これに対して、中国語の会話では、相槌の言葉はずっと少ない。中国語の相槌言葉という、「嗯」(en) ぐらいである。日本語の「はい」「そうですね」「うん」などに当たる。現代中国語は、基本的には敬語のない言語なので目上の人にも、目下の人にも使える。だから、中国人学習者が日本人と日本語でコミュニケーションを行う時、中国語の影響を受けて、よく「嗯」で相槌を打つことがある。すると、日本人にはこの中国語の「嗯」が日本語の「うん」に聞こえる。周知のとおり、日本語の「うん」はくだけた言い方で、敬意が含まれていない。それで日本人に不愉快な感じを与えてしまい、ディスコミュニケーションになってしまう。

#### c 婉曲表現による障害

日本語でコミュニケーションを円滑にするうえで、欠かすことの出来ない技術として婉曲表現がある。婉曲表現はどこの国の言語にもあるだろうが、日本語には特に婉曲表現が多いようである。昔から、日本では直接的な表現より、少しぼかしたものが美しいとされてきている。話し合い三分、腹芸七分という言葉があるように、日本人同士では腹芸や心伝心といった日本人固有の意思疎通の手段が存在する。しかし、中国人には往々にして通用しないことがある。中国人が日本人に何かを頼んだとする。日本人が直接「出来ません」、「だめです」と断ることはたぶんないだろう。たいていの日本人は「善処しましょ



う」、「前向きに検討します」、「考えておきましょう」などと答える。これは言うまでもなく否定的な答で、断ったことになる。しかし、中国人にはあまり断られたようには聞かえない。承諾してもらったと誤解して、期待していたりして、あとでトラブルを起こすこともある。また、日本人は相手になにか意見があっても、相手を傷付けることを恐れて、できるだけ直接言うことを避け、婉曲表現を使う習慣がある。次の例をみよう。

留学生Kが日本に留学している。Kはピアノが専門で、アパートを借りて、住んでいる。毎晩遅くまでピアノの練習をしている。大家さんは近所の人からも文句を言われている。それで、大家さんはKに「Kさんはお偉いわね、毎日練習で、昨日も夜中まで練習なされたでしょう、近所の皆さんもよくそんな話をするのよ。」という。また、近所の人たちもみんなKさんに「Kさんのお勉強たいへんみたいです。」と励ましてくれる。こう言われると日本人だったら、もうその裏の意味がわかるだろう。しかし、Kさんはその本音を全然聞き取れず、これまでどおり練習を続けて、結局是大家から保証人を通して、アパートを出てほしいと言われるようになる。しかも、もう何回も注意したが、聞いてくれなかったといわれる。Kさんにとっては、まったく突然のことで、わけがわからない。注意された覚えも全然ない。また、逆の例もある。

王さんは日本語学校の機関保証で、来日して一年間勉強し、希望する大学に受かった。入学するには日本人の身元保証人が必要である。王さんは普段親しく付き合っていた主婦の小林さんに身元保証人のことを頼んだ。王さんの合格を心から喜んだ小林さんは、身元保証人を頼まれて、「少し考えさせてください」と答える。主婦で収入がない小林さんは、身元保証人になれないと思ったので、自分の一存では決められないと考えたからである。

翌日、王さんを紹介してくれた団体に相談すると、その団体のバックアップで、主婦でも身元保証人ができることがわかる。喜んだ小林さんはさっそく王さんに「引き受けます」と連絡し、団体に対して身元保証人引き受けの手続きをはじめた。ところが、王さんから身元保証人の依頼を取り消すという電話が入る。「日本語学校の紹介で保証人を買う」というのである。小林さんはとっさに「私が保証人では不安なんだ」と思い、「そうですか」と答えて電話を切ったが、王さんへの不信感が湧いてきた。お金を支払ってまで、なぜ私でない人に頼みたいのか。私に不満があるのだろうか……。ここでは王さんは小林さんが本気で言った「考えさせてください」を断られたと理解したのである。婉曲表現が本音なのか、建前なのか、それをはっきり理解するのはなかなか難しいことである。

#### 四 異文化間コミュニケーション能力の指導

##### 1 国際意識、多文化意識教育

これからの日本語教育において、まず注意すべきところは単なる文法規則を教える言語教育ではないということであろう。今後世界のどこの国においても、その国の人材養成という視点でなく、地球社会を前提とした、多文化共生社会の形成へ向けた教育が求められている。その中心部分に異文化間コミュニケーション教育も位置づけられねばならない。だから、まず学習者に国際意識（地球社会意識）を養成することが一番大切であろう。そうしてこそ、異文化に対する興味を持ち、積極的に異文化間コミュニケーションを図ろうとする、前向きの態度を持つようになるだろう。そして、自文化中心主義を克服すること、自文化中心主義とは自分が最初に習得した文化を第一とする固定的な考え方で、あくまで自分が習得した文化のみが最も優れていて、他の民族や社会は自分の文化を見習うべきで

あるという狭い捕らえ方である。正しい異文化観、つまりどんな文化も、それぞれ固有の価値を内包し、それぞれの社会において長い年月を経て、それなりにそれぞれの内部で合理的な構造を形成している。複数の文化のどちらに、より価値があるという考え方ではなく、どれも同列に位置づけ、相互に異質であっても優劣の違いはない、とする考え方を身につけさせなければならない。

## 2 ステレオタイプと偏見問題

ステレオタイプとは、もともと印刷の業界の用語で、同じ文字や形を繰り返して、紙の上に写し出す金属の鋳造物のことを意味しているが、異文化間コミュニケーション学では型にはまった考え方などを意味する。言い換えれば物事を見てから定義しないで、定義してから見る傾向があり、その定義も自分の文化に基づいて行われるきらいがあることである。

偏見とは「感情的な、柔軟性のない態度」、「客観的な事実というものに関係なく、以前から持っている」ものである。

ステレオタイプと偏見は、異文化間コミュニケーションにおいて、往々にしていろいろなトラブルを起こす原因となる。前述の如く中日両国とも親近感が落ちているという数字をあげたが、ステレオタイプと偏見もその一つの原因であろう。ステレオタイプ現象として、部分を以って、全体を判断することがある。もし、初めて会った相手国の人が親切でいい人だったら、その国の人は全部いいと信じ込んでしまう。実に痘痕も笑窪である。逆だと笑窪も痘痕になってしまう。例えば、中国人には「日本人はけちだ、日本人は冷たい」という偏見を持っている人がけっこういるようである。根拠としては日本人がよく送るお土産が「实在是拿不出手的」（恥ずかしくて、あげられない）「小さなもの」であること、また「割り勘」があげられる。中国の習慣で測れば確かに「けち」になるかも知れない。しかし、相手国の行為を自国の物差しで測ること自体に問題があるのである。日本人側からも同じことが言えよう。中国人留学生の中にはいろいろな人がいるはずである。その中にはごみを分別せずに勝手に捨てる人もいるだろうし、事件を起こす犯罪者も出てくることがある。（日本のメディアは主に悪い事件ばかり報道する傾向があるようで、メディアにも責任があるかも知れない。）すると、日本人の中には、事件を起こした人を以って、中国人留学生全体を判断してしまう人がいる。つまり、局部的現象を以って全局を判断してしまうのである。異文化間コミュニケーションをうまく行うには、あくまでも自分の物差しでなく、相手国の物差しを見つけて、それで測るようにし、早合点せず、ゆっくり観察して、判断することが大切である。

## 3 アサーティブ・コミュニケーション教育

「二 異文化間コミュニケーションについて」において、異文化間コミュニケーション能力として、ルーベンの七つの分類を引用したが、殆どが相手文化を尊重し、相手国の物差しで物事を判断するという内容であるが、(5)の役割行動力のなかに「自己中心的行動—他の者の意見に反対したり、すでに検討された問題を蒸し返したりする行動」がある。これは大切な一要素である。相手の文化を尊重するといつて、決して何でも相手国の文化に服従するというわけではない。「郷に入つては郷に従え」という言葉があるが、異文化間コミュニケーションにおいては、通用しない。この場合は「郷に入つては郷を知れ」と言ったほうが適切であろう。相手を尊重しながら自分の考えや気持ち、権利について適切に主張するコミュニケーションの方法がアサーティブ・コミュニケーションである(八代京子他2001)。八代京子他はアサーティブ・コミュニケーションをするうえで重要なことを次の

ようにまとめている。

- a 相手の言い分, 意見, 気持ちをしっかりと理解, 尊重しようと努める。
- b 相手の言い分, 意見, 気持ちをこちらが理解していることを相手につたえる。
- c 相手を責めずに自分の主張をしっかりとする。
- d 感情的にならずに冷静に対処する。
- e 自分の主張の理由を相手に分かるように論理立てて説明する。
- f 問題の整理に努める。
- j 解決方法を自ら考え提示する。

## 五 終わりに

異文化間コミュニケーションには言語コミュニケーション（バーバルコミュニケーション）の他, 非言語コミュニケーション（ノンバーバルコミュニケーション）があるが, ここでは後者には触れていない。それはこれからの課題にしたい。中日両国の文化を比較しながら, 異文化間コミュニケーションについて自分なりの考えを述べたつもりであるが, 不十分な点も多々あると思う。ご叱正をいただければ幸いである。

注1 三従：婦人が従うべき三つの道。即ち, 家にあっては父に従い, 嫁しては夫に従い, 夫の死後は子に従うこと。

四徳：婦人が修養, 実行すべき四つの徳目, 即ち婦徳（貞順）, 婦言（言葉遣い）, 婦容（身だしなみ）, 婦功（家事）。

三綱：儒教で社会の根本となる三つの大綱, 即ち君臣, 父子, 夫婦の道。

五常：儒教で, 人の常に守るべき五つの道徳, 即ち仁・義・禮・智・信

注2 新文化運動：中国の五四時期（1919年）前後の文化革命運動。初め, その主な内容は科挙に反対し, 学校を作ることを提唱した。また, 古い学問に反対し, 新しい学問を起すことを提唱した。後になって, 旧道徳, 旧文学に反対し, 民族的な, 科学的文化を提唱した。

## 参考文献：

- 石井敏他：『異文化コミュニケーションハンドブック』 有斐閣 1997年1月  
 王毅(中国外交部副部長)：「和平合作, 共创未来」 写在《中日和平友好条約》25周年『求是』 2003年  
 亀井孝・河野六郎他：『言語学大辞典』第6巻 術語編 1996年1月 三省堂  
 川崎晶子：「日本の敬語と世界の敬語」 『日本語学』 1992年 VOL.11 3月号 明治書院  
 国際交流研究所（大森和夫, 弘子）編著 『中国の1万2967人に聞きました。』 日本僑報社 2002年  
 崎山 理： 「言語と文化のかかわり方」 『日本語学』 1992年 VOL.11 3月号 明治書院  
 佐野正之他：『異文化理解のストラテジー』 大修館書店 1995年3月  
 関口一郎編 平高史也他著 『現代日本のコミュニケーション環境』 大修館書店

1999年4月

陳 岩：「談中日跨文化交流中摩擦的主要原因」『日語學習与研究』 2002年1号

《<日語學習与研究>雜誌社

内閣府：「中国に対する親近感」 『外交に関する世論調査』 平成14年

西田ひろ子著 『異文化コミュニケーション』 創元社 2000年7月

100のトラブル解決マニュアル調査研究グループ編著 『外国人留学生100のトラブル解決マニュアル』 1996年 凡人社

八代京子他：『異文化トレーニング』 三修社 2001年4月

八代京子他：『異文化コミュニケーションワークブック』 三修社 2001年夏